



(上) 昭和35年、甲府駅前ロータリー
(下) 昭和25年、拡幅工事途中の「平和通り」。
甲府市役所屋上から北方・甲府駅方面を眺めたもの。

復興の願いを込めた 県都のメインストリート

昭和30年代までの写真からは、甲府駅前の風景も、山都の広々とした雰囲気を感じられる。北口はもちろん表玄関となっていた南口でも、高いビルは数えるくらいで、ほとんどは木造の商店や民家、駅前広場には人も車も驚くほど少ない。背後に山が迫り、拡幅工事中の道路がまもなく南へ延びている。

甲府の街の中心部は、昭和20年7月6日深夜からの米軍による空襲で一面の焼け野原になった。終戦を迎え、甲府駅周辺では、復興して駅へ降り立った人もいれば、都会で焼け出された人、外地から長旅の末、ようやく懐かしい故郷の駅にたどり着いた人も多かった。焼跡の駅前には、バラックが建ち屋台が軒を連ね、戦後復興のまず第一歩が始まろうとしていた。後に「平和通り」と呼ばれる広路1号線が着工されたのは昭和22年(1947)のことだ。既に戦前から都市計画道路網の計画はあったが、終戦後の新たな観点で、戦災復興都市

計画事業として計画が進められることになった。当初、駅前通りの道幅は50メートル、駅前周辺を中心として放射状に郊外に向かって道が延び、所々に広場や公園、緑地帯を設ける計画だったという。その後、現在の道幅36メートルグリーンベルトのある道路と駅前広場の建設が決まり、合わせて支線となる旧泉町・二十人町(現丸の内三丁目、中央三丁目)相生(二丁目)の区画整理も着手された。当時の写真には、通りの東側に沿って、甲府城の二ノ堀の名残りの水路が残っていて、南端の旧丸統青果卸売市場(現立正俊成会甲府教会)まで続いていた様子がよく分る。すぐ脇にひとときわ目立つのは、旧甲府地方裁判所ビル、市内では戦後初の本格的な高層建築であった。

昭和30年(1955)、駅前から県庁、市役所、裁判所、銀行等のある官庁街を通る長さ846メートルの「平和通り」が完成。当時は、まだ旧県立中央病院も通り沿いにあった。現在の相生一丁交差点で左右に折れる、わずか1キロにも満たない長さだが、人々の暮らしになくてはならない道となった。駅前ロータリーには、後に水晶の噴水が造られ、武田信玄像が置かれた。春の信玄公祭りはもちろん、市民の集いにも、「平和通り」は欠かせない舞台となってきた。駅ビルができたのは、ずっと後の昭和60年の秋。「平和通り」と命名されてから半世紀以上がたち、廃止されてしまった屋台の赤ちょうちんを懐かしむ声も聞く昨今である。

さらに郊外へ延び、 高速道路へと続く道に

高度経済成長期を経て、モータリゼーションはさらに進み、昭和49年には国道20号線が大きく南に迂回させる甲府バイパスが開通。また昭和57年には中央自動車道(調布〜小牧間)が全線開通、甲府市の南部に甲府南(旧中道町)と甲府昭和(昭和町)の二つのインターができた。以降、ショッピングセンターや小瀬スポーツ公園、工業団地、アイメッセ山梨、山梨医科大学(現山梨大学医学部)等、都市機能が郊外に広がるに、これ「平和通り」もさらに南へと延長されていった。

まず昭和45年(1970)、道幅20メートル、長さ1100メートルの「新平和通り」伊勢一丁目、千秋橋西通りまで開通。さらに甲府バイパスの下を、ぐり抜けて南へ荒川に沿って左に大きくカーブを描きながら延長され、昭和55年(1980)、二部4車線の「新々平和通り」が、穩池橋まで開通。ついに笛吹川を越え中央道甲府南インターに直結した。そして、昭和61年に開催された「かいじ国体」では、多くの参加者の移動を効率的に可能にさせた。高速道路を経て東京圏とつながった甲府、



昭和40年代、南へ延長された「新々平和通り」との最後のドッキング作業工事。(写真上方が甲府駅方面)

延長された現在の「平和通り」はまさに県都に至るエントランスロードとなっている。21世紀を迎え厳しい経済状況下でも、「中部横断自動車道」「新山梨環状道路」など、県民の期待を現実化する道路網の整備がさらに進展している。「新山梨環状道路」は、甲府盆地を取り囲む全長43キロメートルの環状道路。西部区間は、平成16年、「中部横断自動車道」の一部として、暫定2車線に既に開通。南部区間は、今春、3月14日に開通し、穩池橋手前で「新々平和通り」につながった。地域の発展の礎となり、未来の山梨に大きく夢を開いた「平和通り」の歴史。世界の平和と街の発展に願いを込めた命名を、今改めて思い起こす時かもしれない。



相生一丁目交差点の中央分離帯にある「平和通り」の道標。かつては、ここが「平和通り」の南端であった。

記事監修:山梨大学教育人間科学部 教授 齋藤康彦



やまなし歴史探訪⑧ 時を今につなぐあの日

写真提供:甲府市発行「写真集 甲府物語」より

甲府城の二ノ堀の名残りの水路横には、建設されたばかりの旧甲府地方裁判所ビルが見える。



昭和30年(1955)4月、戦災復興の シンボルとなった新しい道が完成した。 甲府駅前から延びる、 グリーンベルトの平和通り。

昭和22年に、戦災復興都市計画事業として始まった甲府駅前を起点にまっすぐ南下する道路は、昭和30年に完成。空襲で壊滅した甲府市民の願いを込め「平和通り」と命名され、戦後復興と発展のシンボルとなった。道幅36メートル、完成時は相生一丁目までの846メートル。その後、都市機能が郊外に広がるにつれ、さらに南へと延長された。